

スピノザにおける属性の定義

黒川 勲*

【要旨】 スピノザの属性に関する見解は、しばしば問題として取り上げられる。本稿では、特に属性の定義中の知性の意義を明らかにすることを目的として、まず属性の代表的な解釈である「観念論的解釈」と「实在論的解釈」を検討し、『短論文』及び『エチカ』の言表を踏まえながら、「实在論的解釈」の方向が適切であることを示す。続いて、属性の定義中の知性が「可知性の原理」を表現していることを確認した上で、スピノザの無限知性と神の観念に関する見解から、属性の定義中の知性の意義を「神の自己認識」と関連づけて解明する。

【キーワード】 属性 知性 無限知性 神の観念

はじめに

本稿の目的は、スピノザにおける属性の定義の解明を通して、特に定義中の「知性 (intellectus)」の意義を明らかにすることにある。

問題となる属性の定義は次のものである。

「属性とは、知性が実体についてその本質を構成していると知覚するもの、と私は理解する。(Per attributum intelligo id, quod intellectus de substantia percipit, tanquam ejusdem essentiam constituens.)」(E. 1. D. 4)

このデカルトの影響下にあると考えられる定義には、ライプニッツによって直ちに疑問が呈され¹⁾、スピノザ研究史においては二つの解釈が示されている。いわゆる、J・E・エルトマンに代表される「観念論的解釈」とK・フィッシャーに代表される「实在論的解釈」である。

本稿では、まずこれら二つの解釈を検討することから論述を開始したい²⁾。

平成 18 年 5 月 31 日受理

*くろかわ・いさお 大分大学教育福祉科学部哲学研究室

I 属性に関する二つの解釈

1 観念論的解釈と実在論的解釈

観念論的解釈を提起するエルトマンによれば、属性は実体に対して外面的に関係する、知性の認識形式である。論敵であるフィッシャーが、属性の「形式主義的解釈 (die formalistische Auffassung)」と呼ぶゆえんもここにある。エルトマンは次のように述べる。

「スピノザはデカルトと一致して、実体はその存在のみによっては知覚されず、ただ属性によってのみ知覚される。(端的な存在は向自存在にすぎず、知覚されるということは對他存在であるから、当然である)」³⁾

エルトマンによれば、実体に対して「属性は実体に外面的に帰属する」⁴⁾ものであり、すでに属性という言葉自体が実体に固有なものではなく、実体に「帰されるもの (quod ei attribuitur)」, すなわち「他によって (ab alio)」であることを示していると思なすのである。そして、知覚において実体に対するものこそが「知性 (Verstand)」であるとする。

「さらに、スピノザは定義のなかで、属性が実体を構成するとは言わず、知性が実体を知覚するものと言う、そして属性が実体の本質を表現するという言表を使用する際に、本質が表現される場所は常に知性である。」⁵⁾

すなわち、エルトマンの解釈によれば、属性は実体自体には内属しないのであり、外的知性がそれ自体は無規定な実体に付与する「規定 (Bestimmung)」となる。エルトマンは次のように述べる。

「属性は確かに実体の本質を表現する規定である。属性は実体の本質を一定の様式で表現するのであり、一方実体は存在のいかなる様式も持たないのであるから、属性は実体の外に、観察する知性において存在するのである。」⁶⁾

こうしたエルトマンの観念論的解釈に対して、フィッシャーは実在論的解釈を提起する。フィッシャーによれば、エルトマンのように属性を実体に内属させず、実体の外に、すなわち「知性の中に」存在するとするならば、属性は知性の概念を前提することになる。しかしながら、スピノザによれば、知性は思惟の属性のもとで考えられる思惟の様態である。エルトマンの解釈は、属性と様態との区別において誤り、さらに定義において属性に様態を論理的に先行させる二重の誤りを犯していることになるのである⁷⁾。

エルトマンに対してフィッシャーは属性が実体に内在し、実体を実在的に構成するものと思なす。フィッシャーによれば、スピノザは神あるいは実体は属性から構成されているのであり、属性は神の永遠・無限な本質を表現するものである。属性が実体から区別されるのは「絶対的無限」と「自己の類における無限」の無限性の区別によるとする。フィッシャーはこうした解釈を、スピノザが「神あるいは神の全属性 (Gott oder alle Attribute Gottes, Deus sive omnia

Dei Attributa)」と表明していることを根拠に主張する。換言すれば、神あるいは実体は内属する全属性の「総体 (Inbegriff)」と見なすのである⁸⁾。

こうした属性の実在論的解釈に基づき、さらにフィッシャーは「神の属性は力である」⁹⁾と主張し、属性の具体的様相を「力 (Kraft)」であると見なす。

「原因の概念には必然的に作用性と活動の概念が属している。神がすべてのものの原因であるならば、これらは神の活動であり、神は単にこれらの内在因ではなく、同時に活動的・産出的原因である。活動的原因は力である。神は唯一の原因であり、したがって神のみがすべての様態を産出し、それらにおいて一定の仕方でも活動する力である。」¹⁰⁾

フィッシャーによれば、神はいわば「根源力 (Urkraft)」であり、属性はその神の本質を構成しているのであるから、属性は神の力と見なしうるのである。

2 属性に関する解釈の方向

スピノザの属性に関して、観念論的解釈あるいは実在論的解釈のどの方向性をとるのが適切なのであろうか。続いて、エルトマン及びフィッシャーの見解を念頭に置きながら、属性に関する解釈の方向を考察したい。

まず、属性の定義の文法的な読解を確定しておかなければならない。属性の定義においては、ロビンソンが指摘するように¹¹⁾、文法上の両義性が存在する。それは現在分詞の主格である「構成する (constituens)」が男性あるいは中性にとられうることから生じる。constituens が男性名詞「知性」にかかり、男性にとられるならば、実体の本質を構成するのは知性となり、属性は知性が知覚において、実体の本質を構成する際に使用するものとなる。ロビンソンによれば、「属性はただ知性が実体を見るもの、知性自身が実体に持ち込むもの」¹²⁾となる。すなわち、観念論的解釈を強く示唆することになる。一方、constituens が中性の関係代名詞 quod にかかり、中性にとられるならば、実体の本質を構成するのは属性である。再びロビンソンの言に従えば、「属性は実体の本質を実際に構成するものである」¹³⁾。この解釈は実在論的解釈の方向を示すことになる。

しかしながら、constituens を男性にとるか中性にとるかという問題は、『エチカ』において属性の定義と同様の内容をもつ他の言表を参照することによって解決することができる。

「…無限知性によって、実体の本質を構成していると、知覚されるうるすべてのもの(…、quod quicquid ab infinito intellectu percipi potest, tanquam substantiae essentiam constituens,)」(E. 2. P. 7. S)

この言表では、現在分詞の主格である constituens は quod 以外にはかかりえず、中性以外にとりえない。したがって、先の属性の定義における constituens は quod にかかり、実体の本質を構成するのは知性ではなく、属性とすることが適当である。しかしながら、こうした文法的な読解の確定が直ちに観念論的解釈を退けるものではない。この読解はエルトマンも認めているところでもあり、観念論的解釈の基点は、属性の定義中の「知性の知覚」にあるからである。

しかし、属性の定義中の「知性の知覚」を強調するあまり、エルトマンのように知性を実体の外にあたかも自立的に存在するものと見なすことは、スピノザの存在論的体系において極めて困難である。周知の通り、スピノザの存在論的体系における中心は「神 (Deus)」であり、神は次のように定義される。

「神とは、絶対無限の存在者、すなわちその各々が永遠・無限の本質を表現する無数の属性から構成される実体、と私は理解する。(Per Deum intelligo ens absolute infinitum, hoc est, substantiam constantem infinitis attributis, quorum unumquodque aeternam, & infinitam essentiam exprimit.)」(E. 1. D. 6)

そして、この絶対無限の存在者である神は、唯一の実体である (E. 1. P. 14)。そして、他の存在者はすべてこの神の変様として、神から産出されることになる。すなわち、神は無限の実在性を有しており、その神の本性が与えられるならば、定義から帰結が必然的に導き出されるように、直ちに無限に多くのものが必然的に導き出されなければならない (E. 1. P. 16. Dem)。換言すれば、神は「無限知性によってとらえることのできるすべてのものの作出因 (Deum omnium rerum, quae sub intellectum infinitum cadere possunt, esse causam efficientem)」(E. 1. P. 16. C. 1) であり、かつ神は「絶対的な第一原因 (Deum esse absolute causam primam)」(E. 1. P. 16. C. 3) である。すなわち、「自然の中にはただ一つの実体 [神] しか存在しない (in rerum natura non, nisi unam substantiam, dari.)」(E. 1. P. 14. C. 1, [] 内筆者) のである。

そうして見れば、エルトマンのように知性を絶対無限の実体である神の外に、あたかも自立的に存在するものと見なすことはできない。むしろ、知性は実体である神の変様として、神に対して依存的にとらえなければならない。

また、これもよく知られている、スピノザの「能産的自然(natura naturans)」と「所産的自然(natura naturata)」との区別に注目して、神を能産的自然、知性を所産的自然と見なし、あたかも知性を神とはまったく異なる実在界に位置づけようとすることも不可能である。能産的自然と所産的自然とは、まさに神と神の変様の関係に立っている。スピノザによれば、それら相互の区別は「実在的区別(distinctio realis)」ではなく、「様態的区別(distinctio modalis)」である。実在的区別とは実体間の区別であり、様態的区別とは実体自身と様態とのあいだの区別、あるいは同一の実体の様態相互間の区別を意味している。様態的区別の核心は、実体はその様態なしにも考えられるが、様態は実体なしには考えられないという、様態の実体に対する完全な依存性にある。こうした様態的区別の意味を、先のスピノザの神は「すべてのものの作出因」であり、「絶対的な第一原因」という見解と総合して見れば、能産的自然と所産的自然との関係は「内在的因果関係」と考えなければならない。能産的自然と所産的自然との「内在的因果関係」は、換言すれば、生成するものが、生成された事態を含みながら同一にとどまる相を示しており、決して異なる実在界を指し示してはいない¹⁴⁾。所産的自然である知性は、能産的自然である神において、神によって考えられ、神の内部に位置づけられる存在者なのである。

さらに、エルトマンように属性を「知性の中に」、実体を規定する認識形式として解釈しようとすることも、スピノザの存在論的体系から見れば不可能である。スピノザにおいて、知性は有限様態であり、「思惟の属性—無限様態 (直接無限様態—間接無限様態)—有限様態 (観念、知性、意志等)」という思惟の属性における存在者の系列の末尾に位置づけられることは明白で

ある。まさに、エルトマンはフィッシャーの言うように、属性と様態との区別において誤り、さらに定義において属性に様態を論理的に先行させる二重の誤りを犯していると言わざるをえない。

こうして見れば、属性の解釈に関して観念論的解釈の方向をとることはできない。スピノザは最初期の著作『短論文』において、これまで一般に神に帰せられてきたが、実際には神に属さない属性について言及している。それらは、自己自身からあるいは自己自身によって存在する存在、万物の原因、全知、全能、永遠、単純、無限、最高善、無限なる慈悲者等々である¹⁵⁾。スピノザによれば、これらは「神が何であるかを認識せしめる所以の属性」¹⁶⁾を示してはおらず、神を形容する、いわば形容詞的な「特性 (propria)」を示しているに過ぎない。そして、神の本質を示す属性について次のように述べる。

「神を神たらしめている所以の属性に関して言えば、それはその各々が自らで無限で完全でなければならない無数の実体のみである。」¹⁷⁾

この言表に見るように、スピノザは神を実体として規定しようとし、かつ属性を実体と等置してとらえている。最初期の著作として、実体、属性の用語法が未整理である観は否めないが、属性を実体と等置する理解は主著『エチカ』においても確認できる。フィッシャーが言うように確かに、スピノザは『エチカ』第1部定理19において、「神あるいは神の全属性」と属性を実体と端的に等置して述べている。

「神あるいは神の全属性は永遠である。(Deus, sive omnia Dei attributa sunt aeterna.)」
(E. 1. P. 19)

この定理の証明において、スピノザは神の属性は神の実体の本質を表現するもの、すなわち実体に属するものとして理解されなければならない、それ故神の本質について言及されるものは、属性自身の内にも含まれていなければならないとしているのである (E. 1. P. 19. Dem)。属性は実体の本質を構成し、表現するものとして実体に内属する。それ故、属性を実体と本性上、等置してとらえなければならないのである。また、このことは『エチカ』第1部定理10においても端的に示されている。

「実体の各々の属性は、それ自身によって考えられなければならない。(Unumquodque unius substantiae attributum per se concipi debet.)」(E. 1. P. 10)

「それ自身によって考えられる」ことは実体の本性である (E. 1. D. 3)。属性は実体の本質を構成し、表現するものとして、同時に「それ自身によって考えられる」ものでなければならない。まさに、「各々の属性がそれ自身によって考えられることが、実体の本性となっているから」(E. 1. P. 10. S)なのである。

こうして見れば、フィッシャーの实在論的解釈のように、属性は実体に内在し、実体を実在的に構成するものと見なす解釈の方向が適切であると考えられる。さらに言うならば、神においてその本質と存在、その本質と能力は同一である。

「神の存在と本質は同一である。(Dei existentia, ejusque essentia unum & idem sunt.)」
(E. I. P. 20)

「神の能力はその本質そのものである。(Dei potentia est ipsa ipsius essentia.)」
(E. I. P. 34)

この言表からすれば、フィッシャーが「神の属性は力である」とする見解を肯定するとともに¹⁸⁾、神の属性は存在を表現していると考えなければならない。スピノザの属性は、神の実体の本質を実在的に構成し、思惟あるいは延長という「自己の類において (in suo genere)」、神の永遠・無限な存在と能力を表現しているのである。

これまで、エルトマンの観念論的解釈とフィッシャーの実在論的解釈を検討することによって、スピノザにおける属性の解釈は実在論的解釈の方向をとることが適切であるとした。しかしながら、属性の定義が「知性の知覚」の内容を含んでいることは事実である。もちろん、この「知性の知覚」を観念論的解釈が示すように、属性は実体に対して外面的に関係する、知性の認識形式であると見なすことはできない。それでは、属性の定義中の「知性の知覚」はどのように理解されなければならないのであろうか。続いて、この定義中の知性の意義について考察を進めたい。

II 属性に関する知性の意義

1 属性と知性

属性が知性と関連づけられて規定されることは、近世合理論哲学においては特異なことではない。スピノザが直接の影響下にあるデカルトの『哲学原理』では、52節から57節に属性についての言及がある。デカルトにおいてはスピノザと異なり、物体を延長の実体、精神を思惟の実体として認めるのであるが、それらの実体はそれが存在するものであるということだけで、直ちに認識されるのではない。われわれが実体を認識するのは「何らかの属性によって (ex quolibet ejus attributo)」であり、ある属性が現存していると理解することから、われわれはその属性を帰属させる実体もまた必然的に現存していると結論するのである。また、実体である物体と精神の「主要属性 (praecipuum attributum)」とは延長と思惟である。この主要属性について、デカルトは当の実体の本質を構成しており、また延長及び思惟の様々な様態は、これらの属性を前提し、これらの属性によって認識されるものであると指摘する。そして同時に、主要属性そのものは、様態に依存せず認識しうるものと端的に認めている。

「この固有性〔属性〕が実体の本性並びに本質を構成しており、他の固有性はすべて実体に帰属せしめられる。すなわち、長さ・幅・深さにおける延長が物体的実体の本質を構成し、思惟が思惟の実体の本性を構成している。というのは、物体に属しうる他のすべてのものは、延長を前提しており、延長をもつもののある様態であるにすぎず、同様に精神のなかに見いだされる他のすべてのものは、様々な思惟の様態であるにすぎないからである。こうして、例えば形は延長をもつ事物においてでなければ理解しえず、運動は延長をもつ

空間のなかでなければ理解しえない。また、想像・感覚・意志などは、思惟するものにおいてでなければ理解しえない。しかし反対に、延長は形や運動がなくても理解しうるし、思惟は想像や感覚がなくても理解しうる。」(〔〕内筆者)¹⁹⁾

デカルトにおいて、属性とは実体の本質を構成するとともに、実体の存在及び実体の様態を認識するための「可知性の原理」としてとらえられるものである。そして、この可知性の原理としての属性が知性と関連づけられて規定されることは極めて自然である。スピノザとデカルトでは実体論、ひいては神理解において決定的な相違点が存在するが、属性による実体の本質の構成、主要属性としての延長と思惟、そして可知性の原理という点に関し、属性についての理解は一致していると考えられる。

スピノザは『エチカ』第2部定理1及び定理2において、延長及び思惟を属性として、唯一の実体である神に帰属させる証明を行っている。その思惟の属性に関する証明では、具体的な認識である「個別的思考 (*singularis cognitio*)」は、デカルトと同様に思惟の様態としてとらえられ、個々の思考が知的に把握されるためには思惟の属性が必要であり、神はすべてのものの原因として、その思惟の属性が帰せられなければならないとする展開をとる。そして、特に属性が実体及び様態の可知性の原理であることは次の定理において確認される。

「現実に有限な知性も、現実に無限な知性も、神の諸属性と神の変様を把握しなければならぬ。そして、これ以外の何ものをも把握しない。(Intellectus actu finitus, aut actu infinitus Dei attributa, Deique affectiones comprehendere debet, & nihil aliud.)」
(E. 1. P. 30)

こうして見れば、属性が実体の本質の構成し、実体及び様態の可知性の原理としての性格を有する以上、スピノザの定義において「知性の知覚」の内容をともなっていることは決して特異なことではなく、実体及び様態の認識可能性を示すためには、むしろ定義中に明確に規定することは必要とさえ言えるのである。

2 無限知性と神の観念

それではさらに、可知性の原理としての属性における知性はどのような意義をもっているであろうか。本稿においては、スピノザの属性の解釈の方向として、實在論的解釈が適切であるとした。すなわち、実体及び様態を知りうるものとしての知性は、実体の外に自立的に存在するものとすることはできない。また同時に、属性を知性の中の認識形式とすることもできない。続いて、属性における知性の意義を、先に見た属性の定義の言表と平行する『エチカ』第2部定理7注解の文中の「無限知性 (*infinitus intellectus*)」に注目することによって考察して行きたい²⁰⁾。

スピノザの存在論的体系において、無限知性は思惟における無限様態に位置づけられる。また、無限様態は直接無限様態及び間接無限様態に区別されて考えられている。元来、神の本質は唯一単相としか言いようのないものであるが、「類(*genus*)」によって概念的に区別される。それらが、スピノザにおいて思惟の属性と延長の属性である。しかしながら、属性は神の本質を構成し表現するものとして、神の本質と等置されるものである。それ故、属性は神と同様に

無限であり、永遠でなければならない(E. 1. P. 19)。この属性のもとに、神的実体に対して無限なものであれ、有限なものであれ様々な様態が考えられる。しかし、無限様態は他のものによっては決定されないという無限性の意義から、ただ神の属性の「絶対的本性(absoluta natura)」から直接に生起するか、そのように生起した直接無限様態を「媒介して(mediare)」間接に生起しなければならないかである。

「それ故、必然的に無限に存在する様態は、神のある属性の絶対的本性から生じてこなければならない。そしてこの様態は、神の本性から直接に生じるか、神の絶対的本性から生じるある様態の変様、すなわち必然的に無限に存在する様態的変様を介して生じてこなければならない。(Modus ergo, qui & necessario, & infinitus existit, ex absoluta natura alicujus Dei attributi sequi debuit; hocque vel immediate vel mediante aliqua modificatione, quae ex ejus absoluta natura sequitur, hoc est, quae & necessario, & infinita existit.)」(E. 1. P. 23. Dem)

無限様態は神の本質から論理的に導出される無限性を有している。しかしながら、存在論的に見れば、様態として「他のものによって考えられる」、すなわち「神によって考えられる」まさにその点において、その無限性は神の絶対的・普遍的本質に比すれば相対的な、より具体的な特殊の本質を表現していると考えなければならない。そして、この関係は直接無限様態とそれを「媒介して」生起する間接無限様態についても考えなければならない。すなわち、間接無限様態は直接無限様態に比してさらに普遍性を下降し、より特殊的な本質を表現するものと見なさなければならない。

直接無限様態と間接無限様態が、延長及び思惟の属性について、何を意味しているかには幾つかの議論がある。例えば、ロビンソンは延長の属性に関して、直接無限様態を「運動と静止」とし、間接無限様態を「全宇宙の相」としている。また、思惟の属性に関しては、直接無限様態を「神の観念あるいは神の本質の観念」とし、間接無限様態を「神の本質から必然的に生起するすべてのものの観念」として、同時に両無限様態を無限知性と見なしている²¹⁾。ここでは、直接無限様態と間接無限様態との区別には詳細に立ち入らず、ロビンソンに従って両無限様態を無限知性ととらえておきたい²²⁾。そして、スピノザにおいて、この無限知性と等置されるものが「神の観念 (idea Dei)」である。

「それ故、思惟のなかにある神の観念、あるいは神のある属性の絶対的本性から必然的に生じてくるもの〔無限様態〕は、限られた持続をもつことはできない。むしろ、その属性によって永遠である。(Ergo idea Dei in cogitatione, aut aliquid, quod necessario ex absoluta natura alicujus attributi Dei sequitur, non potest determinatam habere durationem: sed per idem attributum aeternum est,)」(E. 1. P. 21. Dem, [] 内筆者)

さらに、スピノザにおいて「観念あるいは認識 (idea sive cognitio)」として、観念は認識の意味に解される。すなわち、神の観念は「神の認識」を指し示している。そして、神の認識の対象とは、唯一の実体であり、他のものはすべて自らの様態として包括する神自身以外にありえない。神の観念は神の自己認識を示していると考えなければならない。同時に、神の観念が神

の自己認識であるならば、また無限知性は神の自己認識を意味していると考えなければならないのである。換言すれば、神が無限知性において自己を認識しているが故に、無限知性は神的実体及びすべての様態を認識しうると言うことができるのである。

こうして見れば、属性における知性の意義とは、実体及び様態の可知性の原理としての性格を明確に示すものであるとともに、可知性の原理を成立せしめる根拠としての神の自己認識を意味していると理解しなければならない。スピノザにおいて、神は属性によって、無限知性において、自己自身を認識しているのである。

結語

本稿において、スピノザ哲学を解釈する上で重要な属性の定義を取り上げ、特に属性の定義中の知性の意義を明らかにすることを問題とした。その際、エルトマンの「観念論的解釈」とフィッシャーの「实在論的解釈」の検討を端緒として考察を開始した。スピノザの存在論的体系においては、实在論的解釈の方向が適切であると考えられる。神的実体と全属性は等置されるのであるから、属性は実体に内在し、実体を実在的に構成するものと考えなければならない。属性の定義及び神の定義に見られるように、まさに属性は実体の本質を構成し、実体の本質を表現しているのである。続いて、近世合理論哲学において、属性の定義中の知性が「可知性の原理」を表現していることを確認した上で、無限知性に注目することによって、知性の意義についてさらに考察を展開した。スピノザの無限知性は無限様態であるが、その内容は神の観念を意味している。同時に、神の観念は神の自己認識を示すことから、無限知性は神の自己認識と等置してとらえなければならない。すなわち、属性における知性の意義とは、実体及び様態の可知性の原理としての性格を明確に示すものであるとともに、可知性の原理の根拠としての神の自己認識を含意していると理解しなければならないのである。最後に、こうした一定の結論を踏まえて、本稿で問題とした属性の定義中の知性と人間知性との関連について述べておきたい。

スピノザの存在論的体系において、人間知性は思惟の属性のもとでとらえられる有限様態であり、神的実体の外に自立的に存在するものではない。むしろ、神的実体の内部に依存的に位置づけられる存在者である。しかしながら、それ故にこそ人間知性は「無限知性の一部 (*Mentem humanam partem esse infiniti intellectus Dei*)」(E. 2. P. 11. C)をなしているのである。スピノザにおいて、確かに人間知性は、現実的存在である身体を対象とする観念、すなわち精神が有するものであり、有限な様態として考えなければならない。しかし、このことは人間知性が無限知性と質的にまったく異なるものであることを意味していない。無限知性の射程が文字通り無限であるのに対して、人間知性は現実的身体の限界内において有効に働かうるのである。換言すれば、その限界内において、人間知性は無限知性の一部をなし、神の観念あるいは神の自己認識を部分的に構成しているのである。本稿では、属性の定義中の知性を無限知性と理解しているが、その知性を人間知性ととらえることも原理的には可能である。人間知性は無限知性あるいは神の自己認識の一部として、実体及び様態の可知性の原理の根拠を自らの内に有していると考えなければならない。人間知性は属性によって実体及び様態を認識しうる。スピノザが言うように、まさに「現実には有限な知性も、現実には無限な知性も、神の諸属性と神の変様を把握しなければならない」²³⁾のである。

註

『エチカ』からの主な引用文には、その末尾に引用箇所を略号で示す。『エチカ』第二部定理 13 の補助定理 3 の後にある公理は、E. 2. post P. 13-L. 3. A. 2 である。また、D. は定義、Dem. は証明、C. は系、S. は注解を指す。また、本稿の論述において重要と見られる定理等については、引用文に原文を付す。原典は次の通りである。Spinoza : *Ethica* , Opera Bd. II, im Auftrag der Heidelberger Akademie der Wissenschaften, hrsg. von Carl Gebhardt, Carl Winter , 1972.

- 1) ライブニッツは、『エチカ』の属性の定義について、この定義によって、実体に関する第一の、解明不能である、本質的なすべての述語を理解できるのかという疑問を呈している。Leibniz: *Ad Ethicam B. d. Sp.* , Die Philosophischen Schriften von Gottfried Wilhelm Leibniz Bd. I. , hrsg. von C. I. Gerhart, Olms, 1960, p. 139
- 2) 以下の属性に関する二つの解釈の紹介は、河井徳治氏のまとめを参考とした。河井徳治、『スピノザ哲学論攷』, 創文社, 1994, p. 341-p. 344
- 3) J・E・Erdmann: *Versuch einer wissenschaftlichen Darstellung der Geschichte der neuern Philosophie*, 2. Aufl. , Stuttgart, fromman-holzboog, 1977, S. 59
- 4) Erdmann, *ibid.* , S. 60
- 5) Erdmann, *ibid.* , S. 60
- 6) Erdmann, *ibid.* , S. 60
- 7) Kuno Fischer: *Geschichte der neuern Philosophie Bd. II* , Carl Winter, 1946, S. 378
- 8) Fischer, *ibid.* , S. 382
- 9) Fischer, *ibid.* , S. 381-S. 382
- 10) Fischer, *ibid.* , S. 390
- 11) Lewis Robinson: *Kommentar zu Spinozas Ethik* , Felix Meiner, 1928, S. 64
- 12) Robinson, *ibid.* , S. 65
- 13) Robinson, *ibid.* , S. 65
- 14) ここで示した能産的自然と所産的自然の関係については、拙稿「スピノザにおける能産的自然と所産的自然」, 『シンポジオン』, 第 48 号 2 分冊, 広島大学哲学研究室, 2003. において論じたものである。
- 15) Spinoza: *Korte Verhandeling* , Opera Bd. I , p. 44
『短論文』の訳出にあたっては、Edwin Curley (edited and translated): *The Collected Works of Spinoza I* , Princeton University Press, 1985. を参照した。
- 16) Korte Verhandeling, p. 45
- 17) Korte Verhandeling, p. 44
- 18) ただし、フィッシャーの言う全属性の「総体」が、各属性の総計としての総量を意味しているとすれば、スピノザの実体論と相容れないものとなるだろう。「すべての実体は必然的に無限」(E. 1. P. 8)であり、「実体の可分性を帰結するいかなる実体の属性も考えることはできない」(E. 1. P. 12)。すなわち、属性を実体内で独立した存在と考えることはできないのである。むしろ、神の実体の統一に基づいて、全属性を神の実体の全体と見なければならぬ。
- 19) Descartes: *Principia Philosophiae* , *Oeuvres de Descartes VIII* , Publiées par Adam & Tannery, Librairie Philosophique J. VRIN, 1996, p. 25
- 20) 本稿 1 章 1 節において、属性の定義の文法的な読解を確定するために参照した定理である。
- 21) Robinson, *ibid.* , S. 311
- 22) スピノザ自身は書簡 64 において、シェーラーの「神から直接に産出されるものと無限な様態的変様を媒介して産出されるものの例」の問いに答えて、直接無限様態を思惟においては「絶対無限知性 (*intellectus absolute infinitus*)」, 延長においては「運動と静止」としている。

また、間接無限様態を「全宇宙の相」と見なしている。Spinoza : Epistolae , Opera Bd. IV, Epistola 64, p. 278.

ここで示した無限様態についての見解は、拙稿「スピノザにおける最単純物体と複合物体について」、『シンポジオン』, 第 47 号 2 分冊, 広島大学哲学研究室, 2002. において論じたものである。ただし、そこでは思惟の属性における直接無限様態と間接無限様態との区別について一定の見解を示している。すなわち、直接無限様態は無限知性、間接無限様態は「諸観念の分析と総合の側面」の極限的な可能的総合としての個体、いわば「無限単純観念」と解釈している。23) 本稿 2 章 1 節において、属性が可知性の原理であることを確認するために引用した定理である。(E. 1. P. 30)

付記：本稿は平成 17 年度日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究 C）による研究成果の一部である。

The Definition of “Attributum” in Spinoza’s Philosophy

KUROKAWA Isao

Abstract

In this paper I tried to understand Spinoza's definition of “attributum” or attribute. For this purpose I regarded the investigation into signification of intellect in the definition of attribute as the important problem. In order to solve this problem, I would consider the idealistic interpretation and the realistic interpretation of attribute. And I would examine Spinoza's thoughts of infinite intellect and idea of God. In Spinoza's philosophy, intellect in the definition of attribute expresses the principle of perceptibility, and moreover signifies the reason for the principle of perceptibility.

【Key Words】 attribute, intellect, infinite intellect, idea of God